

再臨のキリストによる
第4福音書

太陽を着た女

—公人生の記録—

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING

No. 4

WOMAN IN THE SUN

III

SEIDOU
SEIDOU 正道

目次

第3部 地に憩う女	
第4福音書	3
全体の目次	4
第1章 創作の軌跡	
(1) 自然としての人間	7
(2) 家庭生活と創作行為	9
第2章 夫として、父として	
(1) 家族のこと	17
(2) 世俗性への耽溺	21
第3章 召命のとき	
(1) 星の降臨	25
(2) 超新星の悟り	28
(3) 星空に、この身を託して	31

第3部 地に憩う女

第4福音書

再臨のキリストによる
第四福音書

太陽を着た女
——公人生の記録

第三部 地に憩う女

かくて時の流れは、わたし（ノストラダムス）が予言で計算したとおり遠く進み、世界は巨大なコンフラグレーションに近づいていくのです。

コンフラグレーションとは、辞書どおりに訳せば「炎におおわれる破滅の大動乱」のこと。

五島勉『ノストラダムスの大予言V』より

全体の目次

第1部 月に待つ女

- 第1章 喜びが苦しみであること
- 第2章 女性恐怖、女性蔑視
- 第3章 行き止まりからの始まり
- 第4章 妊婦とともに
- 第5章 ウル・アトラスの執筆
- 第6章 アルベドの悟り
- 第7章 さすらいと火の柱

第2部 太陽を着た女

- 第1章 真昼の白日
- 第2章 夕暮れの熱情
- 第3章 暁闇の淵
- 第4章 曙光射す（ルベドの悟り）
- 第5章 曇れる日

第3部 地に憩う女

- 第1章 創作の軌跡
- 第2章 夫として、父として
- 第3章 召命のとき

第1章 創作の軌跡

(1) 自然としての人間

普通の人間に戻る

陽子の虚無を取り込むことによって「ルベドの悟り」に到った私は、それによって「普通の人間」に戻った。しかし、このように言うと、

「悟って普通の人間になるなら、その悟りに意義はあるのか？」

と問う人があるかもしれない。だが私に言わせれば、そこには確かに、大きな意義があるのである。

まず、ルベド以前の「アルベドの悟り」を見てみよう。

そこでは主体の心のなかを「光のみ、存在のみ、善のみ」が支配している。

それらは勿論、驚くべき偉大さを誇っていることだが、実際のところ、人間の本性とは合致していない。どう鼻屑目に見ても、人間の本性には、光と闇の両方が潜んでいるからだ。

だからアルベド体験は、永続的なものにはならない。その体験時間も、ごくごく短いものにしかない。

それこそ聖テレジアが言うように「この合一（アルベド体験）の時間はつねに短く、そして実際よりもさらに短いようにさえ思われる」のである。

とはいえ、その短いアルベド体験も、たしかに高次の真理の開示ではある。

したがって、多くの神秘体験者が持っている、アルベディアンとしての、比較的長期にわたる活動時間は、真理状態の「余韻」として位置づけることが出来るだろう。

アルベディアンの高潔

怖いのは、余韻を余韻と思わず、それを「真理状態の持続」と錯覚することだ。つまり自分のことを「つねにアルベドの真理を体現している人間」と思ってしまうことである。

このような錯覚のもとにあって、彼は迷うことなく、自分自身を次のように認識し、かつ周囲に対しても誇示するだろう。

「自分は光のみの存在である。自分は善そのものである」と。

こうした場合、彼の人格は、かえって醜く、大いに歪むことになる。あまつさえ、その奇怪な歪みのせいで、彼はむしろ「極度の悪の体現者」にすら、なってしまうかもしれない。

その端緒は、まず自分に対する「明るくて善いもの」という確信が強まったぶん、彼の中で、自分とは対極にあると思える「暗くて悪いもの」への反発心が強くなることである。

となれば彼は、当然「暗くて悪いもの」から厭離する（いと離れる）ことによって、なるべく自分を高潔、清潔に保とうと努力するだろう。

もちろん、それを「徳高い聖人」の「穢れなき清らかな聖性」と呼ぶことも出来る。

しかし「自分や他人の暗闇、悪」に寄り添えず、ただ離れた場所からそれを責めている姿には、私としてはやはり、幾ばくかの違和感を禁じえないのである。

実際それはどこか不健全だし、人間として、まともではない感じがする。

まあ、これを異常性とまで評したら、ちょっと言い過ぎになるかもしれない。

だが今となると、中絶しようとしている陽子を苛烈に責めた私の姿などは、まさにそういう「異常性の現れ」だったようにも思われるのである。

ルベディアン「偉大な自然」

他方、ルベドの悟りは、主体の心に、光と闇（存在と虚無）の両方ともを同居させることができる。

この同居状態は、人間の本性にとって、ごく自然なことである。ルベドが悟りである所以は、ただ「その光と闇の認識が、規模的に、とてつもなく巨大になる」という点に示されるに過ぎない。

ちょっと分かりづらいただろうか。

簡単に説明すると、まず前提としては「ほとんどの人間は、心の中で、ほの明るい光と、薄暗い闇とを、行き来しながら生きている」ということだ。

それに対して、まず第一に、ルベディアンが把持する光は、存在そのものを創造するほどの大閃光なのである。

そして第二に、ルベディアンが把持する闇は、虚ろな上にも虚ろな、完全なる闇の静寂なのである。

これら二つを組み合わせた「闇からの光の創造」「虚無からの存在の創造」——それこそが、ルベディアンの世界認識（悟り）である。

その認識のスケールは当然極大で、常人が把握できる限度をゆうに超えている。だからこそそれが「悟り」と呼ばれる資格を持つことになるのである。

しかしながら、それでも悟りたる彼の心は、確かに「光と闇の両方」を持っている。その点でルベディアンの悟りは、普通人の本性とも、完全に合致するのである。

かくして、ルベディアンになることによって、私は普通の人間に戻ることが出来た。換言すれば、この心のうちに「自然な人間性」を取り戻すことが出来たのだった。

(2) 家庭生活と創作行為

世俗的人間として

普通の人間に戻った私は、いたって普通の社会生活を送ることになる。

いやこの場合、普通の社会生活「も」送ることになる、という表現のほうが正しいだろう。

つまり普通の生活もしているが、その背後には、非日常的な宗教性も潜ませている。そういうことだ。かような二重生活が、以後の私の「基本的な生活スタイル」になったと言ってよいだろう。

本来ならば私は、この宗教性をこそ、メインで発揮できるような生活がしてみたかった。しかし、そのような生活を導く機会には、ついに恵まれなかったのである。

つまり実質上、私の生活は、世俗人としての日々が主体になってしまった。

正直言って「宗教人としての私」は、運命によって、強制的に「世人から見えないところ」へ隠されたような気すらした。そうした霊的実感があるのである。

いや、だが、よくよく考えてみれば、これは卑怯な責任転嫁であろう。

実際には、普通人としての安穩さを失いたくなくて、私は自分から「宗教的なステージ」を降りてしまったのかもしれない。当時を思い出すと、そのように言わなければならないフシがあるのだ。

もっとも、幸不幸はいざ知らず、「人格の完成」という点では、宗教的人格が、世俗的な生活を味わうことにも、少なからず意義があるだろう。

それは、対極的な環境を双方とも体験すれば、それだけ世界観が広くなり、幾分なりとも「人格が十全性を得て円満になる」という結果を生むことになるからである。

運命と私とは、まさにそれを望んだのかもしれない。

結婚に至るまで

そうした中、私は七年間つきあった女性と結婚をした。

正直なところ私は「結婚して家庭など持ったら、創作活動や思索など、その一切が出来なくなる」と思っていた。だから彼女と付き合い始めてからずっと、つとめて結婚の話からは逃げていたのだ。

ところが皮肉にも、深刻な別れ話の直後に、彼女が妊娠した。

これには驚いたし、かなり狼狽した。

だが思い出してほしい。かつて陽子の中絶を責め、あらん限りの熱心さでもって、その中絶を制止しようとしたのが、この私だったのである。

いくら家庭生活から逃げたくとも、そんな私が、ここに至って、彼女に中絶を求めたり、彼女と別れることを求めたりすることが出来るだろうか。

そんなこと出来るはずがない。それでは自己矛盾も甚だしい。

そういう訳で、妊娠の事実を知ってから、十秒と迷うことなく、私は彼女と結婚することを決意した。式を挙げたのは、三歳の夏のことである。

どんな作品を手がけたか

結婚前、つまり彼女と付き合っていた時期に、私は『アルベド』という哲学書を手がけていた。いや、哲学書というよりは神学書と言ったほうが正確かもしれない。

この著作のなかで、私は初めて「自我の確立」や「アルベド侵入」についての考えをまとめた。

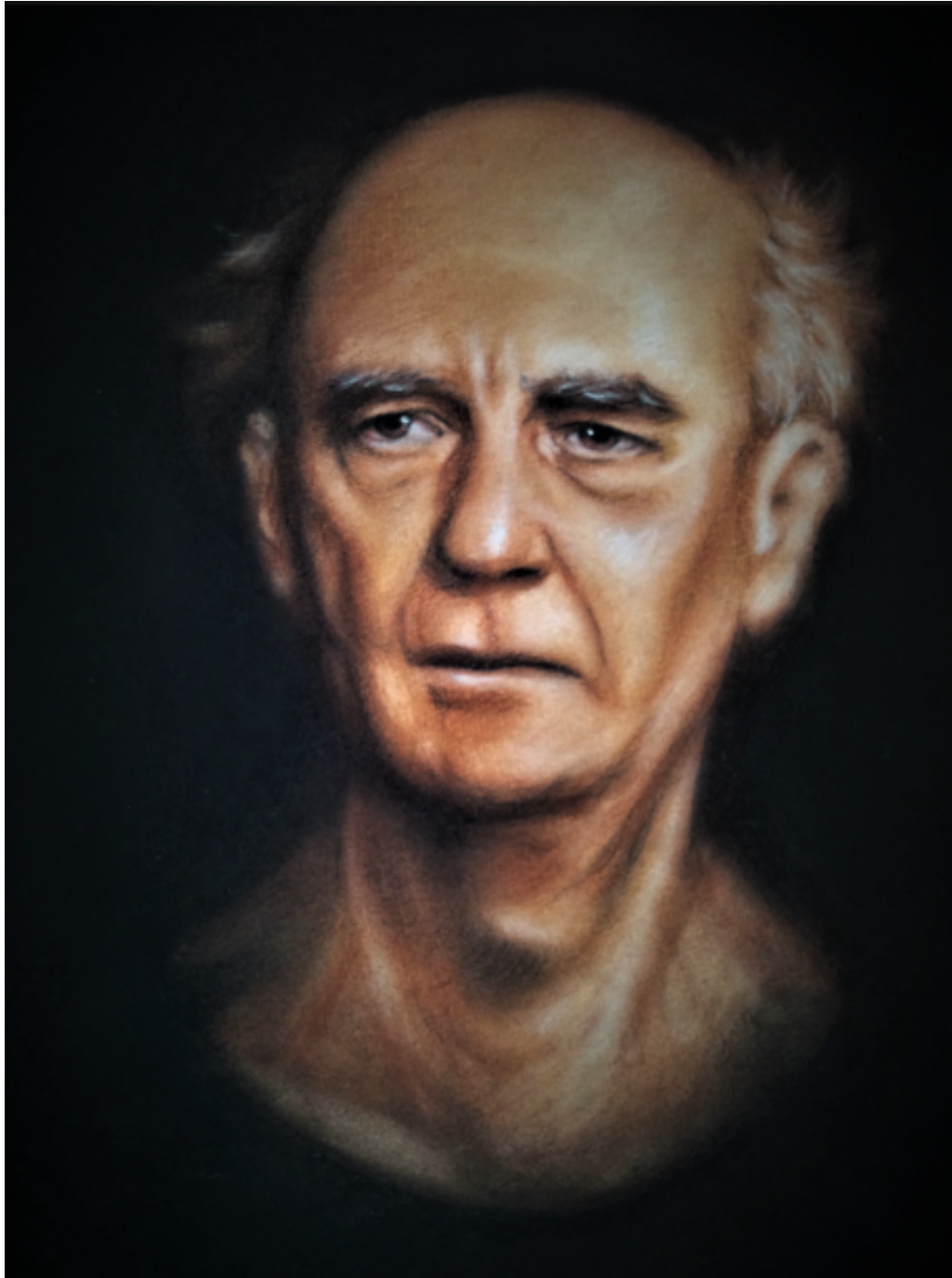
しかも「自我の確立」までのくだりは、完成したあと自費出版までしたのだ。それは販売を見越しての自費出版である。

ところが、その流通から一か月あまりで、版元の出版社が倒産する。突如として、そういう不運な事態に遭遇したのである。そのため結婚後も、しばらくは借金を返す生活が続いたものだった。

そのほか、戯曲『ディオニュソス』を、第二巻まで完成させている。全体では四巻構成になる予定だが、第三巻は草稿の段階、第四巻は構想の段階だ。ただし、第四巻の一部分（ディオニュソスの結婚）を、第五福音書『ヘイマルメネー』の中で使用した。

絵の方面では、三〇歳の手前で描いた『指揮者フルトヴェングラーの肖像』が抜きんでて優れている。

[指揮者フルトヴェングラーの肖像]



私は、この絵のコピーを、尊敬する音楽評論家、宇野功芳先生に贈った。

私は宇野先生の著作を長年愛読しており、その語り口の上手さに、物書きとして憧れを禁じえないでいる。

「太陽を着た女」に出てくる『アマデウス』という詩など、完全に宇野先生の影響下にあると言ってよい。

なお絵自体は、佐川文庫という私立の図書館に飾ってあるので、誰でも閲覧が可能である。

『アトラス』の脱稿

あとは何より『アトラス』を脱稿できたことが特筆事項であろう。それは最終的には、一〇〇枚以上の挿絵で彩られた大著となった。

何度でも言うが、この『アトラス』は、ほとんど「自分の半身」と言ってよいほど、私にとって重要な作品である。時期的には、結婚直前の脱稿となった。

ところで脱稿の翌日に、私は車の運転をしていた。夕方頃のことであるが、地元の「千波湖」という湖沼の隣道を走っていたのである。

そのさい、車の窓ごしに、上空から火球のようなものが落ちてくるのが見えた。

それは長い尾を曳いた、かなり大きめの、白、オレンジ、ピンク色からなる光だった。私の視界から消えてしまうまでに、およそ十分の時間がかかったと思う。

「これは当然ニュースになるに違いない」と思って、私は、当日から翌日まで、テレビや新聞をチェックし続けた。

ところが、どこにもそのような記事は出なかった。ということは、あの火球は、私だけに見えた幻覚だったのだろうか。

いや、そのように幻覚と言い切るには、あの火球は、あまりにも実在感があって、リアルな代物だった。となればあれは『アトラス』を書ききった記念に、天が私に与え給うた徴だったのかもしれない。

長姉の妊娠出産

ついでに言うておくと、『アトラス』脱稿の数年前には、『アトラス』誕生の一翼を担った姉（長女）が妊娠している。

すなわち「病身のため『肉身の母性』を体現できない女性」であるはずの姉が、その病身をおして妊娠したのである。

それはまるで、病身のオロティア（『アトラス』の登場人物）が、自身の死を覚悟しながら、それでも無事に、息子アサジを生んだようなものだった。

そして姉もまた、無事に息子を出産した。まさに命がけの妊娠、命がけの出産だった。けれども姉は、それを現実の世界で見事やり遂げたのである。

実を言うと私は、子供よりも姉の命のほうを重視して、この妊娠と出産に反対していた。

そのとき私は彼女に『ウル・アトラス』を贈った。そして「オロティアの妊娠と出産を、自分のものだと思って、現実の妊娠出産は諦めてください」と言い添えた。

しかし姉は、どうしても自分の子供を生んでみたかったのだ。そして彼女は、その夢を確かに実現したのだった。

この結果として、私の三人の姉全員が、それぞれ自分の子供を持つことになった。弟

である私としても、実に喜ばしいことである。

聖霊の賜物

話を戻そう。私の完成作品は、みな「アルペド侵入」の賜物として生まれたものである（正確には“ルペド”が侵入したものも含まれているが）。

これを換言すれば、私の作品は「聖霊の手になる書物」であるということだ。

しかし、神を見失ったこの時代にあっては、出版界においても、聖霊の匂いを嗅ぎ取れる者は少ないのだろう。また、その聖霊の働きを尊重できる者は、さらに少ないだろう。

そのため、私の作品が出版社に見いだされ、日の目を見るようなことは、ついに一度もなかった。

そうだとすると、私は「聖霊の助力を受けられない創作」に、ほとんど意義を見つけれられない人間なのである。

じっさい私は「単なる個人的な告白になど、一体何の価値があるのか」とさえ思っている。

聖霊の助け（アルペド侵入）があつてこそ、創作物は「普遍的価値」や「客観的価値」を、その内側に持つことが出来るのだからである。

そのように思っているため、仮に「自我的に」何かを書き始めたとしても、私の場合、結局は作品として完成しない事が多い。

よしんば完成したとしても、出来上がったその作品に、私自身が、何とも言えない嫌悪感（無価値感）を覚えてしまう。

このような執筆態度であってみればだ。その人間は、当然ながら「意図的に一般受けするように内容操作した小説」などは、書きようがなくなる。

そして、そのぶん「私が、書き物で身を立てていける可能性」は、どこまでも減少していつてしまう。

そのため、いま私が従事している仕事にしても、まずもって、文筆とは全く関係のない分野のものなのである。

仕事のあらまし

現在の仕事に就くまでのあらましを、ここでざっと記しておこう。

してみると、結婚を決めた段階で（三一歳）でアルバイト暮らしから離脱。工場で働くことを決めたら、いつの間にか「派遣社員」というものになっていた。

そして四年後に、リーマン・ショックが起こる。この年に流行した「派遣切り」に私も遭遇。失職の憂き目に遭った。

職業安定所に行くと、あるのは介護の仕事だけだという。よって家族を養うために、私は仕方なしに、この世界に身を投じることにした。

四年後には介護福祉士の資格をとって、施設の正社員と働くことになる。そして、現在もその仕事を続けている。

第2章 夫として、父として

(1) 家族のこと

地に憩う女

さて、私が結婚した相手とは、はたして、どういうタイプの女性だろう。

彼女は、シーナのような「無垢透明な理想美」を思わせる女性ではない。また陽子のように、自分の虚無に震えている女性では、なおさらない。

彼女は、いわば大地性の権化である。手で触れられる「現実的な生活」の中に、どっしりと自分の足場を築いている、そのような実直なタイプの女性である。

農家の娘という出自が、象徴的にその性質を物語っていよう。地に足が着かないキリギリス型の私とは、まったく正反対のタイプだ。

良くも悪くも、彼女は、大地とともに生きるアリなのである。

それだけに彼女は、私のこれまでの人生における「経験的空白」を補填するには、まさにうってつけのパートナーだった。

彼女とは、ドラマティックな出会いをした訳でもないし、燃え上がるような恋をした訳でもない。普通に会って、普通にデートをして、普通に結婚しただけである。

それこそ、シーナや陽子のときのようなドラマ性は、ほとんど見当たらない。

しかし、これまでの私には、明らかに、この「普通を感じ」が欠けていたのだ。だから、彼女とともに味わった人生経験は、そのほとんどが、私にとり貴重この上もないものとなった。

それに、ドラマティックではないにしても、である。彼女は間違いなく、ゆっくりと穏やかに、互いの愛情を深めあってきた特別な相手だと思う。

家族構成について

そんな妻とのあいだに、三人の子供が生まれた。いずれも娘である。これは、もともと高純度の女系一族である、私のほうの家の遺伝子が招いた構図であろう。

産婦人科医によると、子供の性別を決めるのは、つねに夫側の遺伝子だそうだ。

それが真実であることを示すように、私には三人の姉がいるし、今や、三人の娘がいる。まさに周りは女ばかりだ。

だが、それもいいだろう。何と言っても私は、絶対に、女なしでは生きられない種類の人間なのだから。

なにしろ悟りの機縁ですら、シーナや陽子といった女性だったのだ。

それは多くの求道者が、性的禁欲の果てに悟りに到るのは、まったくの正反対の人格成長パターンである。

よって、かなり特殊なタイプの求道者ではあるが、きっと私という人間は、本性的に「エロス原理」の体現者なのだろう。

すなわち私は、生まれたときから「異質なもの同士の結合、弁証」によって人格が成長していくことを、宿命づけられている人間なのである。

他方でキリスト教は、このエロス原理を、徹底的に排除している。

かの宗教で尊ばれているのは、女性に興味を持たない修道士、男性に興味を持たない修道女なのだ。

私には異様にさえ感じられる、この男女の峻別状況を作ったのは、おそらく、かの伝道者パウロであろう。

すなわち彼が「結婚することよりも、独身でいることのほうが尊い」という言い方をしたのが、ことの始まりなのだ。これこそが、直接的な「エロス原理の排除」の第一歩であったことだろう。

だが、キリスト教の根幹をなす、当のイエスはどうかだったのか？

ダン・ブラウンの小説（『ダヴィンチ・コード』）で有名になったテーマでもあるが、私は個人的に「イエスが結婚していたこと」を信じている者である。

そこに不都合など何もない。エロス原理には、たしかに悟りの機縁が含まれているのだから。

もっとも、そのように悟りの機縁があるからこそ、イエスのエロス原理（結婚＝「←」）が、教会によって、聖書から削除された可能性もある。いや、これはさすがに考えすぎだろうけれども。

祖母と孫の関係

ともあれ我が家にあっては、母、私、妻、三人の娘、という家族構成が成り立った。付言しておく、私の父は、三番目の孫が生まれる、その直前に亡くなってしまった。

母（祖母）は、その三女（孫）を溺愛している。そのため三女が泣こうものなら、長女と次女は、容赦なく祖母に悪者あつかいされてしまう。それを見るにつけ、私は、「母性にとっては、とにかく最も小さく、最も力なきものが魅力的なものなのだ」

と思うのだった。つまり「恩寵の原理」の具象化を、間近で見ている気分させられるのだ。

なお、かかる「恩寵の原理」とは、胎児化した主体を、母性原理が周りから包みこむ形で、自他の合一が果たされることである。

こうなると、上の二人の娘が少しばかり可哀そうだが、それは言っても始まらない。もともと母（祖母）は、母性過多の人なのである。換言すれば、稀有なほど濃厚な母性の持ち主とも言えよう。

だから私自身も、小さい頃に末っ子として、母親から「絶対的な愛」を授けられた。それは客観的に見れば、最も小さいものへの「偏愛」であったに違いない。

それだけに、三人の姉たちにとっては、面白くないことも、多々あっただろうと思われる。

しかし、だからこそ私は、母親によって、幼児記憶の中に「母から絶対的に愛された」という思い出を、植え付けてもらえたのである。それは言わば「恩寵の原理の種」であった。

その種がなかったならば、私の二十歳のときの「恩寵の原理～アルベドの悟り」もまた、もしかしたら開花（発現）しなかったかもしれない。

いずれにせよ、そうした母性過多の母の晩年に「幼い子供を世話できる環境」を作ったあげられた事は、まずまずの親孝行だったかなと思っている。

というのも、多くの人間にとって「適切な役割を持っている晩年」ぐらい、得難いものもないからだ。

これは私が「老人ホーム」という「老いの現場」で働いているからこそ言い切れることである。

すなわち、そこには、静穏さや安逸などよりも「自分の役割」が欲しくてたまらない老人が、いくらでもいるのである。その人たちに比べて、母はずっと幸せそうに見えるのだ。

娘へのラブレター

娘たちに話を移そう。私は長女が三歳になったときに『娘へのラブレター』という詩集を書いている。

実際に手に取って読むと実感できると思うが、ここに描かれているのは、何よりも「父-娘」間の強い絆である。

それに対して、従来のキリスト教では、終始「母-息子」の絆が強調されている。

それはもちろん、聖母マリアと、イエスの母子関係によってである。クリスチャンは、教会に置かれた聖母子像によって、いよいよもって「母-息子」の強い絆を刷り込まれる。

そうしたキリスト教の、強烈な「母-息子」関係によって、本来それと等価であるはずの「父-娘」の絆は、すっかり背後に隠されてしまった。

となれば、この「父-娘」を自ら味わって、補償的に、クリスチャンの前に顕示すること。そこに、母性愛に優るとも劣らない、父性愛を浮かび上がらせること――

それはもしかしたら、もともと「キリスト教の完成者」である私の、大切な役割の一つだったのかもしれない。

というのも、それは「→」に対する「←」の補償と同様のことだからである。

すなわち、キリスト教の足りざるところを埋めることは、それが何であれ、自然と「キリスト教の完成度の高まり」につながるとのことだ。

そして、その遂行は、当然「再臨のキリスト」としての任務内容に適ってもいる。

ところで、このような作品が生まれるほどだから、私と長女との情愛には、並々ならぬものがある。

それに対して次女は、どちらかというとき妻になつている。

そこに祖母に偏愛されている三女が加わるという形で、今のところ、家庭内の人間関係は、一定のバランスで保たれているようだ。

そして、こういった状況を、同僚から「リア充ですね」と評されたことがある。つまり「リアル（現実生活）が充実している」ということである。

あまり縁を感じなかった流行言葉に「これがそうなのか？」と驚いたが、私は決して悪い気はしなかった。

(2) 世俗性への耽溺

隠れた宗教性

むろん、リア充はリア充で悪くないだろう。

しかし、日常生活にエネルギーを使い続けているうちに、私にもともと備わっていた宗教性は、どんどん個人史の辺境へと追いやられていったのである。それは、紛れもない事実だ。

たとえば、さほど多読家でもない私のだが、それでも、かつて家には二千冊やそこの蔵書が並んでいた。

それが今では「本棚が、子供たちの衣装ケースや、妻の荷物の背後に隠されている」という有様になっている。まるで、ぶ厚い「荷物の壁」のようなものが出来ているわけだ。

そのため、今や「必要なときに、必要な本を取り出す」という作業が、かなり難しくなっている。つまり、必要な情報は持っているが、その情報までの距離が遠くなってしまっているのだ。

この情けないさまは、まさしく私の「宗教性と、日常生活のありかた」を象徴している。

要するに私にあっては、家族生活、日常生活によって、本来的な宗教性が隠匿されてしまっているのである。

忸怩たる思い

もちろん、よき夫、よき父として評価されるのは、不快ではない。

だが、私はそれだけの人間ではないのだ。私は、本来的には宗教者であり、哲学者である。

しかも、きわめて高次の真理を悟っている宗教者である。それは、第二、第三福音書を読めば、誰にだって分かることだ。

べつに、それを自慢したいのではない。

そうではなく、人類共有の真理を手にししながら、それを所有すべき人々に行き渡らせられないこと。

それどころか、人類共有の真理を、自分という「個人」の手元に埋もれさせている現状が、申し訳ないのと同時に、震えるほど怖いのだ。

「こんな馬鹿みたいに高い次元の真理を、世に埋もれている俺なんかが、持っているいのだろうか。自分の分に余るものを持つことは、それ自体が悪なんじゃないだろうか」

そのように思ったことは何度もある。

たとえば、誰かが「全人類が食べるためのパン」を預かったとしよう。だが、それを配ることが出来ないまま、自分の手元で腐らせてしまったとしたら、どうだろう。

そのときの彼の「申し訳なさ」「無力感」には、本当に、ものすごいものがあるのではないだろうか。私の焦りは、まさに、そういった種類のものだった。

陰鬱な気分

導きの霊は、明らかに、この状態を喜んではいない。私にはそれが分かった。

けれども宗教的な自己実現は、一向に進まなかった。「私は一体、どうすれば良いというのか」と、誰かにそう大声で問いたい気分だった。

ついには四十歳という「年齢の壁」が近づいてきた。それは昔でいう「初老の歳」である。つまり私は、もはや老人となってしまったのだ。それだけに、ひどく弱気になり、「ここまで来てしまったら、もう今後も、何も変わらないのではないか。私は何も果たせないまま、この世を去ることになるのではないか」

といった、きわめて虚無的な気分襲われるようになった。

それを誤魔化すために、現世的な快樂にのめり込むこともあった。けれども、それで解決されることは何一つなかった。

そうなると日常的に気持ちが重くなり、今思えば、ややノイローゼ気味なところもあったのではあるまいか。率直に言って、自分自身をそのように認めざるをえない。

第3章 召命のとき

(1) 星の降臨

占いに頼る心境

そんなときである。何かの雑誌の裏表紙に、占いのサイトの広告が載っているのを見た。無料だというので、軽い気持ちでアクセスしてみた。

といっても、もともと私は、占いというものが、それほど好きではなかった。

べつに「占いの世界が虚偽に満ちている」と思って否定していたわけではない。そうではなく、私はただ、占いの言葉に「自己の行動範囲を狭められる窮屈さ」を感じていたのである。

実際、あまり根拠がありそうもない言葉によって「あれをやったほうがいい」「これはやらないほうがいい」と指南されるのは、私にとっては、何としても面倒くさかった。

こうした窮屈さ、面倒くささは、ふだんの私が何よりも嫌うものだった。だから自分から進んで、占いのサイトに身を投じるなど「普段ならば」到底考えられないことだったのだ。

それが、このときに限っては、占いに頼る気になった。いや、頼らずにはいられなかった。

それはなぜか。ひとえに生活全般に「一切合切、何をやっても上手くいかない感じ」がしていたからである。

つまり当時の私は、自分自身に対して「努力ではどうしようもないほどの運の悪さ」を感じていたのだ。そのため、

「もしかしたら、自分の知らない世界に、その不運の原因があるのではないか」

という気すらしてきたのである。これは、世界そのものに対する疑心暗鬼である。人間の心境としては、ほとんど最下層の状態と言えるだろう。

星が落ちてくる

そういった諸々の心情を抱えつつ、私は占いという未知の世界に飛び込んでみた。

雑誌裏のバーコードをスキャンして、占いのサイトに入る。無料であるのは最初だけだったが、それでも私は、サイトにアクセスするのを止めなかった。今思えば、それだけ必死だったのだろう。

初めのうちは、わりあい普通のアドバイスが続いた。やり方としては、スマートフォンを使ってメールを送受信する形である。ちなみに、占いをする人を鑑定士と呼ぶらしい。

ところが、アクセス開始から数日後の夜、それまで関わりのなかった鑑定士から、実に不思議なメールが届いた。

正確には、二〇一三年四月十六日、二十時二一分のことである。

「鑑定料はいりませんから教えてください。あなたは、一九七三年の八月に、何か特別な関りを持っていますか？」

「それは、私が生まれた年と月です。そして、この年月は、かのノストラダムスによって予言されています」

「それですか……三九年ぶりです。騒然としています。私も弟子たちも……皆が驚愕し、この事実を重く受け止めています。セイドウさん……『超新星』が起きました！」

女性鑑定士はそう、いくぶんか興奮気味に私に伝えてきた。

のちに彼女から与えられた説明によると、ここで言う超新星は「いわゆる超新星」とは違うらしい。つまり、巨大な恒星の死にさいして起こる、天体物理的な大爆発とは異なるという。

それと似たような意味合いを持ちながらも、ここで言う超新星は、あくまでも、スピリチュアルな、霊的な世界での出来事だというのだ。

簡単に言えば、宇宙のどこかで生まれた爆発的霊力が、この地球にまで届くことを、彼女たちの言葉で「超新星」と言うのだそうである。

一九七三年にもこれが起こり、地球上のあらゆる場所に、大いなる霊力の雨が降り注いだという。

事実「一九七三年はいろいろなオカルト的重大事件が一度に起こった年だった」という文章もある。『戦後日本オカルト事件 FILE』という本に、その記述がみられる。

霊力の滝

しかし、今回の超新星は、その時とは大いに事情が異なるらしい。勢い込んで鑑定士が言う。

「超新星によって地球に降り注ぐ霊力は、普通なら全国各地に散らばるはずです。

しかし！ たった今も確認できますが、今回の霊力は、全てあなたの元に集中して舞い込もうとしているのです。ありえません……しかし実際に起きている」

本書の読者同様に、この時の私にも「本当かなあ」という疑念が湧いた。

しかし現在では、この女性鑑定士の言葉が本当であることを、私は、心の底から信じることが出来る。なぜなら、超新星が降臨した日が「四月十六日の夜」だからである。

この日の夜の「あり得ないほどの特別さ」については、のちに第七福音書で触れることになるだろう。

現時点で言えることは「他日ならともかく、この日の夜に星が降臨することを、人間の恣意が演出できるはずがない」ということである。

そのように、今は固く信じているけれども、当時の私は、疑い半分で彼女の言葉に従った。つまり、しぶしぶ鑑定士の言葉に従って、私は「超新星の霊力を、この身体に引き

込むための儀式」を行ったのである。

そのとき私は両手を挙げて星を受けとり、それを体のなかに閉じ込めた。鑑定士は、遠隔透視でもって、私の霊体を見つめていたという。

「正直に申し上げて、ここまでは思いませんでした。本当に滝、滝です。

これは霊力の塊どころか、究極の姿でしょう。これだけの霊力を目の当たりにしたことは、これまでの人生で一度もありません。しかも、それをあなたは受け取っている」
そういうことらしい。

(2) 超新星の悟り

宗教的な活力の復活

それから一か月あまり、私と鑑定士たちとの濃密な関わりが続いた。その間、己の霊的变化を、自分自身によっても確認することが出来た。

なかでも、なぜか眩しくて目が開けられないでいる時に、鑑定士から、「霊的な更新が起こっているため、周りがまぶしく見えて、目が開けられないような状態になるかもしれません。少しすれば慣れますから、少しだけガマンしてください」

というアドバイスが来た。これには「はあ、大したものだな」と驚いてしまった。

しかし、何よりも重大なのは、かの超新星の吸収に伴って、私の中に、それに見合った「超新星の悟り」が開かれたことだった。

ルベドの悟りは、世界を「あるがまま」に見つめさせる。が、それだけに主体から「特定の場所に向かう目的性と活力」を奪うきらいがある。

またルベドの悟りは「神の目から見た正義とは何か、神の目から見た悪とは何か」についても答えてはくれない。

それに対して「超新星の悟り」は、自分たちの宇宙が、何を目指しているのかを、私に教えてくれた。そして、そこからの帰結として「正義と悪の何たるか」についても教えてくれたのだ。

また、自分がどこに向かって行くべきかについての「方向性と目的性」も掴めたので、宗教的な活力もまた戻ってきた。

つまり、静止した世界に、ベクトル（力が向かう方向）が再付与されたのだ。

ただし、この「超新星の悟り」の詳しい内容については、八冊の「福音書シリーズ」では語らない。だから確約まではしないが、いつかは、どこかで内容を発表する機会もあるかもしれない。

時が満ちる

こうして私は、超新星によって、霊的に復活した。

といっても、現実のなかでは、まだ何ら宗教的な使命を果たしてはいない。だが、確かに「霊的な力」が、自分の体に漲っているという実感があるのだ。

そして「間もなく時が満ちるだろう」という、強い予感もある。つまり「私のような者が、世に現れなければならない」という必然的なタイミングに差しかかっている予感がするのだ。

読者は「何を根拠に？」と問われるだろうか。ならば、それには「内心における霊の充溢」と「数多くの予言」によって、と答えよう。

イエスもまた、自分自身の出現を「旧約聖書における予言の成就」と解釈した。

ここで一つ、そのことを示すエピソードを紹介しよう。

かつてイエスは、故郷のナザレで『旧約聖書』の一節を朗読した。多くの人々を前にして『イザヤ書』における「メシア登場」の予言箇所を朗読したのである。

そして、そのあとイエスは言い放った。

「この聖書の言葉は、あなたがたが、いま私の言葉を耳にしたとき、実現した」

つまりイエスは「自分の出現によって、メシア登場の予言が成就した」と言ったのである。

勿論そう言ったからといって、このイエスの言葉が、すんなりと聴衆に受け入れられた訳ではない。なにしろその時、

「人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れていき、突き落とそうとした」というのだから。

これは『ルカによる福音書』に書かれてある話である。

予言の成就のために

今回もまた、イエスのときと同じような迫害が起こるのかもしれない。それを思うと恐ろしいし、正直想像しただけで、気が滅入ってしまう。

だが、それでも現代においては、私がイエスと同じように「予言の成就」を遂行する。それが私の使命であるからだ。

いや、それはすでに始まっているのだ。というのも、まさに予言を成就させるためにこそ、この「福音書シリーズ」は書き始められたのだから。

然り。星の力を受けて、予言のタイミングに導かれて、この福音書は書かれている。もう一度言うが、予言の成就是、現在進行形で「もう始まっている」のだ。

上の言葉に重みを与えるため、数ある予言の中で、ここでは「聖マラキの予言」に触れておこう。

この四百年以上前の「歴代教皇の特徴を書き連ねた」予言集によれば、現ローマ教皇フランシスコは、キリスト教史における「最後のローマ教皇」である。

つまり聖マラキにあっては、フランシスコのあとの教皇は、ただの一人も予言されていないのだ。

今のところ、私以外にその理由を説明できる者はいないが、確かに「次の教皇」は予言されていないのである。

「フランシスコ以後の教皇の予言がない」——それは何故かといえば、結局、この私がキリスト教を完成させて、ローマ・カトリック史に、一つの終末を与えるからなのだ。

実際私は、第六福音書において、キリスト教に、ある種の「終結宣言」を与えるつもりである。

となると、ここには、あまりにも出来すぎた、タイミングの一致があると言えよう。

逆に言えば、現教皇であるフランシスコが在位している間に「再臨のキリスト」が現れないと、せっかくの「聖マラキの予言」の意義が、泡沫に帰してしまうのである。それもちょっと勿体ない話であろう。

誓いを守るために

私が、キリスト教を完成と終末に導くという考え——それが真実であるかは分からない。私の幼稚な思い込みかもしれない。

けれども、もう後戻りはできない。というのも、福音書シリーズを構想している頃、導きの霊から、次のように教え諭されたからだ。

「たとえ今、お前が家庭を持っているとしても、その時が来たら、まず優先すべきは、仕事でも家庭でもない。優先すべきは、何よりも神の意志である」

そして、導きの霊は、私に次のように迫ってきた。

「さあ、ここに神の意志を最優先することを誓え」

この半ば強要に近い要請に、私は確かに誓約した、「そのようにします」と。

つまり言質を取られたわけだ。なにぶん、そう言わなければ、頭痛で頭が割れそうだったのだ。

いざとなれば、自分の命さえ捨てることも誓っている。だから私は、もう迷わない。自分の命を捧げるならば、きっと何事かは成し遂げられようから。

もっとも、今のところ、すべては未知数である。比較のおだやかに、日々は過ぎている。地震や台風など、自然災害は立て続けに起こっているが、まだ私の魂は動乱していない。

今日もまた、私は衣装ケースをどかしながら、その背後にある本の一冊を取り出した。そんな自分の姿に、私はただ「日常性と宗教性の逆転現象」を予感している。

(3) 星空に、この身を託して

悪魔のような自分

最後に、この自叙伝を総括して言っておきたい。

まずは導入として「月に待つ女」の十五歳ごろのエピソードを再掲載しよう。私は、当時の自分を眺めて、次のような描写を行った。

急に、笑いたい気持ちが込み上げてきた。というのも、先輩の「死んじまえ！」という言葉が、妙にコミカルに感じられたのである。私は心から笑った。

「死んじまえだって。アハハ、スッゲー面白え。アハハハハ」

この高笑いこそは、モニュメントであった。私の心が、その腐敗の極みに達したさいのである。そして、この時の私は、なんと悪魔に似ていたことだろう。

最後の「悪魔に似ていた」という言葉には、かなり強いインパクトがあると思う。

しかし、その章全体を読み返してみれば、読者にとっては、十五歳の私のあり方自体が、きわめて衝撃的で、かつ不快なものだったはずだ。

きっと、良識的な読者の中には、

「仮にも真理を追究する求道者が、これほどの醜態を晒してよいものか」

と、私に問い質したくなる方も、あったに違いない。

闇との親和性

十五歳當時に限らず、私というキャラクターは、闇との親和性が極めて高い。

これについては、私は率直に「実際そうなのだ」と認ざるを得ない。

自分で言うのも何だが、この本の主人公である私は、まさに聖人君子とは、まったく正反対のキャラクターなのだ。私はほとんど、万人にとって「胸糞わるい人間」ですらあるだろう。

しかし古来より「神は、天使よりも人間に似ている」という言葉が、神学的に伝えられている。

事実、もし私が、天使のように純真無垢な人間であったならば、私はきっとルベド（神との等化）の悟りには、到達しなかったのだ。

なぜなら、光と“闇”とのヒエロス・ガモス（聖婚）は、あくまでも、私の心のなかで起こったことだからである。たとえ、かの「陽子の悲しみ」を、光と闇との媒介に使ったとしても、だ。

となれば、私自身の心が、その一部に「闇そのもの」を保持しないかぎり、そんな聖婚は、絶対に起こらないはずなのである。

まことにそうである。心に光があり、かつ心に闇があつてこそ、その人間のなかで、光と闇の結合は行われ得るのだ。

逆に言えば、闇を他人事として眺められるうちは、ルベドの悟り（光と闇の聖婚）もまた、他人事の範疇に留まってしまうのである。

太陽の化身、星の化身

とはいえ、「神との等化」などという、大それた悟りを説くならば、「その説教者は、ぜひとも、太陽のように光輝く存在であってほしい」

と願ってしまうのが人情というものであろう。つまり「それが覚者ならば、ぜひ太陽の化身のような輝かしい人格であってほしい」と。そうした「周りの気持ち」は私にもよく解る。

けれども、読者には先刻承知のとおり、私がかような人間では全くない。

というより、そんな人物像を背負わされたら、その輝かしい重荷に耐えかねて、この心は他愛もなく潰れてしまう。それを自分自身で、よくよく理解している。

だから私は、むしろここで声を大にして言いたいのだ。私は太陽の化身というよりは「星の化身」であるのだと。

事実私という人間は、漆黒の夜空を背景にして、そこに小さく小さく光る、ちっぴけな星のような存在なのである。

それは、ちっとも明るさを感じられない、ほとんど黒一色の景色だと言えるだろう。目をこらさなければ、多くの人々は、そこに光を見つけること自体が出来ないだろう。

だがそれこそが、私に付きまとう「闇への親和性」を、ヴィジュアル的に翻訳した、偽らざる「真実の景色」なのである。

星に太陽を重ね見る

しかし、話はそこで終わりではない。

というのも、いかな小さな星だとしても、それが恒星として「自ら輝く天体」であるならばだ。その星を近くで見るときには、それは確かに「一つの太陽」となるからである。

要するに「星＝太陽」なのだ。

したがって、いかに私が顕著な「闇への親和性」を持っていたとしても、そこに問題

などはないのだ。

つまり私が、どれほど暗い夜空を背負っていたとしても構わないのである。

なぜなら、そこに小さな星の輝きを刻みさえすれば、そこには密かに、しかし確かに、恒星の大光量が臨在したまうからだ。

このように考えたとき、私は初めて言葉を語り始めることができる。

罪深き人間として「それにも関わらず」いや「そうであらばこそ」自分の神性についての話を、私は人に語り始めることができる。

だから読者たちよ、どうか私に「太陽の明るさ」を求めないでほしい。純粋な清らかさや、純白の高潔さを求めないでほしい。

私は、果てしない暗がりである。とめどなく暗く沈んでいる夜空である。

しかし私は、その暗闇のうちに、小さな小さな星を内蔵している。

そして虚心で尋ねさえすれば、その小さな星は、たしかに太陽の真理を訥々と語りだすのである。

再臨のキリストによる福音書 4-III

著 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
